

フーゴ・ヴォルフの歌曲手法についての一考察
ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』
—ミニヨンについて—

教科・領域教育専攻

芸術系（音楽）コース

藤井 裕子

指導教官 頃安利秀

1. はじめに

歌曲の歴史において極点に到達したのがフーゴ・ヴォルフ (Hugo Wolf 1860~1903) である。ヴォルフは、詩と言葉の可能な限りの統合を目指し、優れた詩人を厳選し、その詩に 300 曲以上の歌曲を作曲した。そして、その詩人の 1 人がゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe 1749~1832) である。

ドイツ歌曲は、1775 年頃から、一つひとつの旋律を詩節ごとに情緒に従って少しずつ変化させる変奏有節形式が生まれ、19 世紀に入ってから、通作形式がシューベルトやシューマンにより定着してきた。さらに、それまでピアノパートと同じ声部をなぞっていた歌唱旋律は独立性を持ち、ピアノパートもただの伴奏ではなく、歌と一体となりながら詩の世界を表す手段として用いられた。このように、ドイツ歌曲の発展は、ゲーテにとっては認められるものではなかったが、歌曲の様式は後期ロマン派により、ますます独立性を増していった。

そこで、本論文では、ゲーテの長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中の登場人物の 1 人『ミニヨン』に関する 4 編の詩を題材として、ヴォルフの歌曲手法の考察を行う。さらに、ヴォルフの歌曲手法の特徴を見いだすため、ライヒャルト (Johann Friedrich Reichardt 1752~1814)、ツェルター (Carl Friedrich Zelter 1758~1832)、シューベルト (Franz Schubert 1797~1828)、シューマン (Robert Schumann 1810~1856)、そしてヴォルフにおける『ミニヨン』の詩の 1 つである同

名の歌曲「君よ知るや南の国」(“Kennst du das Land”) を比較考察する。

2. 本論文の概要

第 1 章では詩と音楽について考察を行った。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の中のミニヨンは、ヴィルヘルムが立ち寄った旅館で出会った軽業師の一座の中にいた人物で、名前も歳も父親もこのだれかわからない神秘的な少女であった。ミニヨンの人物像は、小説の中であまり正確に描写されていないが、『ミニヨン』の詩のほとんどにおいて、惨めさ、苦しみ、悲しみ、絶望を感じる事ができた。第 1 章第 2 節では、『ミニヨン』の 4 編の詩の韻律の分析を行い、ゲーテが詩のリズムをどのように扱ったのかを明らかにした。

第 2 章では、ヴォルフの生涯と作品を考察した。まず、第 2 章第 1 節ではヴォルフの生涯を概観し、第 2、3 節ではヴォルフの歌曲作品の特徴を見いだした。そして、第 2 章第 2 節ではヴォルフの歌曲手法の一考察として『ミニヨン』の 4 編の詩「君よ知るや南の国」(“Kennst du das Land”) 「ただ憧れを知る者だけが」(“Nur wer die Sehnsucht kennt”) 「私に言わせないで」(“Heiß mich nicht reden”) 「大人になるまでこのままで」(“So laßt mich scheinen”) を楽曲分析した。

第 3 章第 1 節では、歌曲の歴史を概観するため、ライヒャルト、ツェルター、シューベルト、シューマン、ヴォルフの歌曲の位置づけや特徴をとらえた。

そして、第3章第2節において、ライヒャルト、ツェルター、シューベルト、シューマン、ヴォルフの歌曲手法を「君よ知るや南の国」（“Kennst du das Land”）を用いて比較考察した。

その方法として、まず詩と音楽の関係性を明らかにした。くり返し用いられる単語を抜き出し、それぞれの作曲者が、どの言葉に強調を置いているのかを示した。さらに、曲中の強拍部分（1拍目）の単語に注目し、詩の詩脚の強部との一致を明らかにした。そして、最高音と最低音、強弱記号の役割について考察し、各作曲者が強調している各節第5、6行“Kennst du es(ihn) wohl?”以降の比較を行った。

その結果、各作曲者のリズム、和声、フレーズ、キーワードの扱い、ピアノと歌の関係などは、時代や各作曲の作風により違いはあるが、作曲者の詩における解釈の違いが1番作用されていることが明らかとなった。

3. おわりに

本論文では、ライヒャルト、ツェルター、シューベルト、シューマン、ヴォルフの同名の歌曲「君よ知るや南の国」（“Kennst du das Land”）」を比較考察することにより、歴史の変遷とともに、その時代の様式に変化が見られ、それぞれの作曲者の歌曲手法の一部を垣間見ることができた。特に、ヴォルフの作曲手法は、半音階の使用によりミニョンの深層心理を表していた。さらに、その深層心理を表す手段としてピアノパートの役割は大きく、曲全体の統一感を与えていた。さらに、モチーフの材料を極度に節約しながら細部にまで光をあてていた。言葉に伴う跳躍や音程は、素材としての詩の芸術性を音楽的に最高度に高めようとし、形式、内容など精緻な工夫が凝らされていた。ヴォルフは、ライヒャルトやツェルターのような韻律に従った作曲法はとられていないはいない。しかし、ヴォルフの詩的想像力、理解力によって、詩と音楽の融合を果た

し、たんなる性格描写だけにとどまることなく心理的状况や思想を音楽の中心に据えた。また、ピアノパートは「伴奏」ではなく全く対等の協力者であり、時には歌よりも重要な役目を果たした。ピアノパートには、より大きく深い表現力を与えられて複雑で多様性に富む重要な役割を委ねられたのである。さらに、ピアノパートはオーケストラ的なものへの拡大を図っており、情景を想像させる効果や歌唱部では表現しきれない感情を表現する役割を担っていた。

そして、強弱記号においては、単に強調する役割を担っているだけでなく、曲の流れや躍動感を与えていた。さらに、音楽の繊細さを表すと同時に、細かく指示を出すことによって、ヴォルフ自身の思い描いた演奏を要求しているように思われる。

今後の課題として、私自身、歌い手として、これらの作曲者の詩の解釈をどのように表現していくのかと言う点が大きな課題である。そのためにも、さらに多くの歌曲を知り、歌い続けるとともに、ヴォルフの歌曲を研究し続け、作曲者の思い描く歌い手になれるよう研鑽していく所存である。

【学位関連演奏曲目：独唱】

Schubert : Mignon “Kennst du das Land”

Schubert : Lieder der Mignon “So laßt mich scheinen”

Schumann : “Nur wer die Sehnsucht kennt”

Wolf : Mignon “Kennst du das Land”

シューベルト : ミニョン「君よ知るや南の国」

シューベルト : ミニョンの歌「大人になるまでこのままで」

シューマン : 「ただ憧れを知る者だけが」

ヴォルフ : ミニョン「君よ知るや南の国」